



平成 30 年は図書館開館 100 周年
あなたのそばにいつも図書館

長岡市立図書館開館 100 周年記念

図書館の思い出

長岡市立中央図書館／編



大正7年（1918年）実業家野本恭八郎（互尊翁）は、
互尊文庫と名付けた図書館を長岡市に寄付しました。

平成30年は、長岡市に互尊文庫が開館してちょうど100
年目にあたります。

それを記念いたしまして「図書館の思い出」を募集したとこ
ろ、20人の方から「図書館の思い出」をいただきました。

その思い出をみなさまにご紹介します。

【掲載は応募順】

明喜 良伊

88歳 無職 長岡市表町

空襲で焼け出されて疎開先の来迎時駅より通学していた私は、あの頃の信越線の発車本数が少ないため時間調整を兼ねて今のアオーレの場所で焼け落ちなかった大きな土蔵の中で開館していた文庫に毎日立寄ったものでした。当時は活字に飢えた人々が大勢で食べるように読書していました。三年後実家が呉服町に再建され近くの互尊文庫に足繁く通いました。当時は、はがき大のカードに本の番号と貸借の日付を記入して管理されていた。

ある時一日返納する日を忘れたため延滞料五円徴収された時は本当に口惜しかった。当時は大変厳しかったものですね。その頃は貸してやると言う態度の事務員がおりましたが、昨今はよく教育されたスタッフの皆さんが気持ちの良い接客態度で対応して下され大変好印象を受けていますが残念ながら笑顔が見られないのがさみしい。今八十八才の私、これから先何年ご厄介になることが出来るのか今から思案しているところです。



高橋 要翔

14歳 中学生 長岡市大島本町

私は、いつも学校のテスト期間中になると、西地域図書館に来ます。理由は、本に囲まれているととても落ち着き集中できるからです。私は、数学が苦手なのですが西地域図書館に来ると数学ワークの難しいところが簡単に分かります。それは、きっと私だけではないと思います。人々は、難しいことや分からないことがあると図書館に来て、帰る頃には解決して帰っていく。図書館は、本当にすごい力を秘めていると思います。私は、本を読むことはもとからあまり好きではありませんが西地域図書館に来て本を読むとなぜか見入ってしまいます。

私は、長岡市の多くの人々が毎日のようにおとずれるこの西地域図書館を大切に、これからも困ったことがあれば、立ち寄りたいと思います。

西地域図書館がここ長岡市にあることを誇りに思います。

田中 公平

73歳 町内役員 長岡市青葉台

母も百歳、互尊文庫も百歳、まことにおめでとうございます。お祝いにペンをとりました。一つ「母と私の三つの願い」①コロリ往生②核戦争に原発まっぴらごめん③ピンポンに互尊文庫もう百年

二つ、「借用している五点の紹介」④万葉集入門⑤世界のたね⑥眩人⑦一茶と山頭火⑧DVD「戦争と平和」

三つ、「招待状を発送しませんか！百年記念に」

大きな海をはさんで大国のトラさんと小国の金さんがケンカしてみんな困ってます。原因は、お金でなく、お核兵器です。トラさんはお核を山ほど持ってますが、金さんはほんの少し、私の国は九条を持つ国、越後長岡は、世界中の爆弾を花火に変える街、アベさんはモリカケにゴルフ好き、金さんとは話しもしません。開府四百年記念に、三名に招待状を送りませんか。旨いお米に旨い酒、蓬平温泉でおもてなしで話し合い、闘牛見物・錦鯉に大花火、ホストは市長さん、知事さんに真紀子さんをお願いしたい。互尊文庫ありがとうございます！



安澤 修

62歳 自営業 長岡市小国町新町

図書館の思い出は多々あるが、やはり一番の思い出は、自分の作品（主に、短歌や俳句が載った本）が本として、書棚で見つけて、それを手にした瞬間です。自分の書いたものが本に成り、つまり活字となっている、かなりの〈重さ〉と〈厚み〉のある一つの本。本が、私は大好きです。人間と同じ位愛着をもっている者です。同じく本好きの人で、何時間も読んでいてもあきない、という兵もいます。

今日、スマホやパソコンなどのインターネット中心の社会ですが、（何でも「産業革命」以来のイノベーションだそうで…）私は、やはり、本は永遠にこの世から消えないと思います。それどころか、ますます「価値」のあるものになっていくでしょう。そして、本を愛するということは、「人生」を愛する事に成ると考えています。つまり、感じ、考え、味わう…これは、正しく「人生」そのものだからです。本を読む、ということは、自分だけではなく、他者（他人）をも思うことです。

【三つ子の魂百までも～私が図書館に通う理由～】

私と図書館の最初の出会いは今を遡ること23年前。当時長岡高校に通っていた近所のお兄さんに連れられて当時、中央図書館の2階で行われていた井上円了の展示を見に行ったことから始まる。当時、にわか妖怪オタクだった私はその展示で妖怪博士井上円了のことを知り、展示を見たその足で図書カードを作り、井上円了の『おばけの正体』を借りて夢中になって読んだ記憶がある。その後も私は学校の図書館や中央図書館に足繁くかよい、学校の勉強では教わらないような知識は、多くを図書館から教わったように思う。

いま、私は地域の歴史や日本の歴史を調べたり、そこでわかったことを文章にまとめたりすることを仕事にしている。その知識の元になっているのは図書館に通って身につけた知識やものの考え方が元になっているということはあるまでもない。

“もし”10歳の私が、井上円了展を見に行かなかったら、そして『おばけの正体』を読んでなかったら、「地域史研究家」としての湯本泰隆は誕生していなかったかもしれない。

そういう意味で、「今の私を育ててくれたのは図書館である」といっても良いのかもしれない。図書館は、ひとりの少年を本好きに変えてしまう。そしてその少年の未来にも影響を与えてくれる。そんな可能性を図書館は秘めている。

創立100周年。ハッピーバースデー図書館。そして、次の100年に向けて、多くの長岡の少年・少女を育てて下さい。



伊豆 早苗

63歳 看護師 長岡市石動町

荘厳なたたずまいの互尊文庫は、学生時代日々の通学路であり、テスト勉強の場でもありました。そしてそこで借りた一冊の本が青春真只中の私に「人間とは何か、生きるとは何か」と問いかけ、本を読む、ということの奥深い世界に誘ってくれました。

それから数十年、孫の6ヶ月健診で出会った「ブックスタート」。図書館の企画であることを知りましたが、頂いた絵本の上を小さな指がたどるたびに、本との出会いを与えてくれる制度に、とても感激したものでした。

そして今、ご縁があって、おはなし会のボランティアとして中央図書館に定期的に足を運ばせていただいています。まだまだ未熟な私の読み聞かせにも、輝く様な笑顔を見せてくれる子どもたちに癒されながら、その瞳の向こうにある限りない想像と夢の世界を見る様な気がします。お話の部屋は玉手箱でしょうか。

これからも年を重ねても心豊かに暮らせる様に、図書館と友達でいたいと思っています。



荒木 武司

74歳 無職 長岡市堤町

終戦から10年が過ぎた昭和30年私は中学生になった。当時の自宅は本町にあったが長岡空襲で全焼したため戦後建てられた狭い家で一家6人で暮らしていた。小学生時代は学校の宿題もなく、帰ってからも友達と遊び一辺倒で勉強部屋もなかった。中学生になると、将来の為に勉強が大事と盛んに云われた。

そんな頃友だちより互尊文庫に学習室があることを知らされ、夕食後徒歩10分で毎日かよった。玄関入口の右に受付があり木の番号札をもらい二階の学習室へ。勉強には最適の環境でした。以後、大学生となるまで約7年間、互尊文庫で勉強した。その後就職で長岡を離れ、50才で親の後を継ぐため長岡へ戻ってきた。以後25年近くがすぎ、互尊文庫も建替えられ、中央図書館を始め市内に多くの分館も出来、現在は図書の貸出で大いに利用させて頂いている。高齢となった今、現在の自分があるのも身近に図書館があったからだと感謝の気持ちで一杯です。

藤沢 優実

38歳 会社員 長岡市殿町

思い出の場所、互尊文庫の学習室。私は青春時代、多くの時間をここで過ごした。学校が休みの日は、開館から閉館まで友人と勉強に励んでいた。当時の学生にとっては自宅以外で勉強できる唯一の公共施設があの学習室だった。そのためいつも満席で、夏の暑い日も雪の積もる日も私たちは朝から並んで開館を待ち、お気に入りの場所を確保したものだった。いつも一緒に勉強していた彼女とは、当時から勉強するばかりでほとんど会話もなかったが、図書館で心を通わせた二十年来の親友である。あるとき私語をしてしまい、監視員のおじさんに鋭い視線で注意を受けた。私たちは人に迷惑をかけてはいけないことも学習した。「筆談」という手段を覚えたのもこの場所だったかもしれない。あの監視員さんの存在が、勉強に集中すべき若者たちの背中を押してくれた。

図書館の学習室はいろいろな意味で、私の社会人の原点になったといま感じている。



山田 周

54歳 会社員 長岡市水道町

言うまでもなく、互尊文庫と呼ばれる長岡の図書館はディズニーランドではない。静かな空間の中で、時に書物を通して涙し、開放感たっぷりのコンクリート作りの古く歴史を感じさせるこの構造物の立ち位置は、映画に例えると、あまりにも有名な「卒業」のラストシーン。ガラス映りの教会から、結婚式から恋人を奪いさり自分の人生を爆発させるターニングポイントになる。そんな場面を互尊文庫の螺旋階段を3階から1階まで、ガラス張りのゆったりした空間に出くわす度に感動を覚えてしまうのが、正直な気持です。私は、図書館のフィルターを通して、言葉という音感ではなく、周りの図書館を愛用する同志の皆様と、静寂の空気からそれぞれの夢を達成させるべく知識の源泉である山本五十六しかり、偉人を生み出してきた宝箱に感謝なさは、少なくないかもしれません。ドラえものの「どこでもドア」のごとく良質の娯楽。互尊文庫、世界遺産たれ。だんだん。

田村 正元

72歳 無職 長岡市栄町

【私のおもいでは図書室から】

初めて行った公民館図書室の印象です。

友だちに「公民館の新図書室に行こう。」と誘われました。小三（1954年）秋で、栃尾市が発足した年です。

公民館（現栃尾消防署）は大きな旧家で、立派な部屋が図書室と思い込んでいましたが、本館から離れた寒々とした部屋（倉庫か蔵）でした。書籍の重量に耐えられる床が、この部屋のみだったそうです。

照明は暗く、机と高い天井に届くほどの本棚が幾列も並び、棚の書籍は難しい（子どもの立場で）ものばかり。子ども用の本や雑誌は無かったと思います。

明るい学校図書室に比較すると、公民館図書室は神秘的な雰囲気と書籍の量に圧倒され、早々と帰りました。帰り道、友だちと一致した結論は「公民館図書室は大人の世界」。

栃尾地域図書館になる前の図書室の思い出です。



荒木 法子

35歳 自営業 長岡市宮原

平成元年、5才の私は父に手をひかれ古書店巡りをするのが常で、本の森の心地良さをすっかり覚えてしまいました。小学生からは中央図書館へ。働き虫の母は「ちょっと1、2時間遊んでいて」と姉に私と弟を任せて仕事へ行くので、絵本コーナーで母を待っていました。14才、私は教室での居場所に困るようになり、小説の棚で“自分よりかわいそうな子”の物語りを探しては読んで、消化できない虚しさから逃げていました。高校では写真部に入り、写真集コーナーに通いました。そこで見る森山大道やアラーキーの世界は、私の居場所のちっぽけさと、その向こうにある光景と熱狂を知らしめました。18才で東京へ。向こう側のリアルに9年間しっかり浸かり、平成24年にUターン。35才の私は今、互尊文庫の郷土史コーナーが気に入っています。長岡の歴史を知って自分のルーツを確認したいのかも。

一つの節目を感じて、これからも本の森を歩んでいこうと思います。ずっとありがとうね！

吉原 貴也

22歳 会社員 長岡市前島町

子どもの頃は、南地域図書館をよく利用していた。今ではほとんど中央図書館に頼るようになったものの、たまに利用することがある。

その南地域図書館だけでも、子どもながらに広いなあ、と思っていたが、中央図書館はさらに広々としていて、天井も高い。子どもだった私にとってその広さは衝撃ですらあった。

小学三年生の時、そんな中央図書館の書庫を見学したことがある。あまり明るいとは言えない広い空間に、本がずらりと並んでいる。ある所には、昔の新聞も保管されていて、図書館の“歴史”を感じたものだ。

高校生の頃は、通っていた高校に近い互尊文庫もよく利用していた。先程の二館とは違って、格が高い！と思う。それもそのはずで、現在の建物は長岡市立図書館の中で最も古い1967年の築なのだ。むき出しのコンクリート、木の色合いが、その歴史を物語る。

そして今年はその互尊文庫開館百周年。大正から平成へ、次の時代へ。おめでとう。



木野本 宏志

78歳 無職 小千谷市旭町

【読者の集いの思い出】

戦後東京の住宅事情から図書館を利用する習慣になっていた私が、この地に移住して間もなく、長岡中央図書館を知った。仕事の関係で小千谷から長岡に来る日が多く、その行き帰りに立寄った。利用し始めてからしばらくして読者の集いが催されていることを知り、出席した。最初のテーマ本は井伏鱒二の黒い雨でありました。当時は10名前後の参加者でした。参加者の読書傾向によって二つの意見に分れ議論し合った。当時私は文学界の事は疎く、作家達の名前すらほとんど知らなかった。芥川賞や直木賞作家の名前もテーマ本になって知り得たので、その作風もその時点で学んだ。その中には私の考えと合わず、読まないで参加することも多かった。特に若手の作品は苦手で、どうしてこの作品が賞に選ばれたか疑問のものもあった。けれどもこの会を通じて多くの友人が出来たことに感謝している。これからも会が発展することを期待する。

川井 文英

76歳 無職 長岡市台町

私は二年前、図書館にあるPHPの小冊子から、父が残した同意の言葉に出会った。

それは、「ローマの哲人・セネカの言葉」中野孝次著にあった。その書籍は館内になく購入の手続きをして下さった。一ヶ月後、互尊文庫より連絡を受ける。

早速、私は本を手し、セネカの壮絶な人生と父を重ね読破した。

セネカの「誰かに起ることは、誰にでも起こる……。そして、死すべきものとして生まれる」と。

父は93才で逝った。日頃から周囲に事ある度に「よそにあることは、何時か我が身にも起るものだ。他人のことをとやかく言うものではない」と。これは、父の多難な日常から自らを戒める為のものだったのだろう。

私は、この書籍から、生きる時代や環境は異っても、置かれた場所で「今」を精一杯生きねばと思った。

日頃より、職員の皆様に感謝しております。



金澤 秀雄

50歳 うどん職人 長岡市川崎

図書館は不思議な空間である。休日によく利用するのだが、急に行きたくなるとワクワクするのである。読みたい本を探しに出かけることもあるし、目的もなく立ち寄ることもある。いつ来ても人がたくさんいるが、静かなところがいい。BGMも心地いい。私は小さな頃は本を読まない子どもであった。漢字はよく覚えられたので、読書の習慣を身につければ、成績が向上すると担任の先生から言われたものだった。成人してから本を読むようになった。書店にもよく足を運ぶのだが、落ちついて本を読めるのが図書館の長所である。様々なジャンルの図書が網羅されているので心が豊かになる場である。現代はスマホに接する時間が長く、本を読まない人も多いと聞いている。一冊の本との出会いが、人生に大きな影響を与えることがある。私がその1人である。これからも図書館を最大限利用してゆきたいし、多くの人に足を運んで、豊かな時間を享受していただきたいと思う。

佐藤 百樹

65歳 無職 長岡市堀金

「図書館の思い出」といわれ、すぐその情景が頭に浮んでこないのは残念なことだ。ただここ2～3年、近くにある北地域図書館との付き合いは密になってきた。しかし、それを思い出と呼ぶにはまだ記憶が若すぎる。

今、私が思っているのは、図書館を通して子どもたちに楽しい思い出を作ってもらおう手助けができないかということ。例えば、秋に拾ってきたドングリをプランターに植えて育ててみる。ドングリに関する本は、子ども向けも大人向けも驚く程多くある。それらを参考にしてとにかく育ててみる。仮に発芽しなかったとしても、その原因を調べることに意味がある。もしうまく芽が出たら、次にどうするか。どこかの森に戻し、自分たちが手塩にかけたドングリの成長を見守る…。「花と緑の本が充実している図書館」のコンセプト通り、子どもたちにいい思い出を作ってやる動機付けになるのではないか。



高澤 秀子

82歳 無職 長岡市長倉

私は、10年程前に、雪深い十日町市から長岡へ引越して来ました。70才を過ぎてからの移住は、慣れるまでに時間がかかりましたが、家族や周囲の人たちに支えられながら暮らしております。何よりも心の支えになったのは図書館です。引越しした当時は歩いて15分位でしたが、今では30分程かかるようになりました。好きな本を読んでいると、時間の経つのも忘れる位でした。庭の景色に眼を癒し時には趣味の句帳を開いて楽しんでおります。二階での映画会や催し物も、遠くまで行けない私にはとてもうれしいことでした。図書カードは、私の大事な宝物です。気候も社会も変動が激しく、生きづらい世の中ですが、平和な日本に生きていることに感謝したいと思っています。残された人生を図書館と共に、ゆっくり歩いていきたいと願っています。昨年文化の日に、図書館で詠んだ句です。「図書館の国旗はためく文化の日」

内藤 瑞穂

13歳 中学生 長岡市猫興野

僕の図書館での思い出はたくさんありますが、その中で1番は、何と言っても小学4年生のころ友人と2人で中央図書館まで行ったことでしょう。

初めて子どもだけでバスに乗り、偶然乗り合わせたクラスメイトに冷やかされながら、中央図書館まで行きました。持って行った弁当が上下逆さになってぐちゃぐちゃになっていたことをよく覚えています。

2人とも同じ小説家のファンで、好きなシリーズの続編を借りに行ったはずだったのですが、2人ともテンションが妙に上がってしまって、何を借りたのかよく覚えていません。

中学生になってクラスが離れ、今はもうあまり彼とは話していませんが、あの時のことはきっと忘れない、小さな冒険だったことは確かなことです。



太田 洋次郎

65歳 無職 長岡市関原町

初めて訪れたのは、小学校のバス旅行だから五十数年前になる。今はもう無い小さな小学校の図書室は、辞書の他は読み尽くした本好きの子どもには、宝の山だった。その蔵書の多さに圧倒された。「一日中ここに居たい」本気でそう思った。

長ずるに及んで本に関わる仕事に就きたいと担任に言ったら「司書だと？お前の学力じゃ無理！それに資格だって簡単には取れん甘いな」と即却下、反論する根性も学力もなく結局書店に就職したのだった。互尊文庫は担当では無かったけれど上司と共に商売で何度も行った。当り前だけれど、図書館職員であろうと一日中本を読んでいるわけでは無い。ケーキ屋が毎日ケーキを一杯食べる訳も無いし本屋が売り物を読んでいたら成り立たない。案外本を扱う仕事は重労働なんですね、「本当に本読むヒマも無い」

貸出カードを作ってもらい本格的に読めるようになったのは辞めてからだ。今日十冊を二週間選ぶ時から読書は始まっている。さあ読むぞ。

木造の洋館、互尊文庫に初めて足を踏み入れたのは昭和40年、齢22歳の時だった。当時の私はプータローの身、毎日が暇だった。何げなく入った所が互尊の読者の集い会場だったのである。室外で眺めていたら「入りませんか？」と誘われ、入室、10人位でそれはそれは楽しそうに喋っていた。月一回の例会に合わせ決められた課題図書を選び、読み、それぞれ読後感を語り合う会なのである。「これは面白そうだ！」と、はまってしまった。年齢も10代から80代の老若男女で活動していた。時々、会員でハイキングや市内外にある名所、旧跡を訪ねたりした。

当時は会の参加者も多く、活気があったから出来たのだろう。その後、緑陰に囲まれ、エキゾチックな風情のある互尊もコンクリート造りとなり、更に数十年後、経年劣化と中越地震のため、亀裂が入り一部雨漏りもするようになった。利用者も多かったこの文庫も時代の推移と共に読者の集いもすっかり参加者が少なくなった。・・・と言う私も参加する事が少なくなった。調べ物や新聞を読むために毎日のように利用させて貰っているのにだ。

当時の互尊文庫は私にとって青春時代の思い出が詰っている充実した時代だった。



《 長 岡 市 立 図 書 館 》



中央図書館
長岡市学校町 1-2-2



互尊文庫
長岡市坂之上町 3-1-20



西地域図書館
長岡市緑町 3-55-41



南地域図書館
長岡市曲新町 566-7



北地域図書館
長岡市新保町 1399-3



中之島地域図書館
長岡市中之島 3807-3



寺泊地域図書館
長岡市寺泊磯町 7411-14



栃尾地域図書館
長岡市中央公園 1-36



大河津地区図書室
長岡市寺泊敦々曾根 551



長岡市立図書館開館１００周年記念
図書館の思い出

平成３０年４月１日発行

編集／発行 長岡市立中央図書館

長岡市学校町１丁目２番２号

電話（０２５８）３２－０６５８